沼津市歴史民俗資料館

資料館だより

Vol.38 No.3（通巻200号）
2013.12.25（年4回発行）

第１号

第100号

カラー化

国指定

資料館だより200号を迎えて

資料館だよりは、昭和49年12月の開館の翌年５月から、館活動の内容を広く知っていただくための広報紙として発行を開始しました。

開館当時の建物は、狭いながらも近代的で博物館としての必要な機能を備えたものとして高い評価が得られていましたが、やはり年月には勝てず、各所に欠点も見られるようになり、館の維持管理や運営も次第に厳しさを増しています。

そのような中で、途切れることなく本紙の発行が続けられてきたことは、市民の皆様のご支援とご理解の賜物であると思います。

次の100号に向けて、より親しみ易いものとするように努力を続けてまいります。

今後もご支援、宜しくお願い致します。

館長　　鈴木裕篤

沼津市歴史民俗資料館と資料館だよりのあゆみ

昭和49年（1974）	沼津市歴史民俗資料陳列館として開館
昭和50年（1975）	資料館だより発刊　年６回発行
昭和56年（1981）	静岡県教育委員会へ博物館登録
昭和57年（1982）	原収蔵庫竣工
昭和58年（1983）	市制60周年記念特別展「白隠とその時代」
昭和59年（1984）	沼津市歴史民俗資料館に改称
平成元年（1989）	開館15周年記念特別展「沼津藩とその周辺―沼津城・沼津藩・菊間藩―」
平成２年（1990）	静岡県指定有形民俗文化財「浮島沼周辺の農耕生産用具」（富士市と共同）
平成３年（1991）	資料館だより通巻100号発行
平成８年（1996）	資料館だよりB5版からA4版へ紙面拡大
平成12年（2000）	資料館だより年４回発行（内１回はカラー印刷）
平成16年（2004）	開館30周年記念特別展「豆州内浦漁民史料と内浦の漁業」
平成22年（2010）	国指定重要有形民俗文化財「沼津内浦・静浦及び周辺地域の漁撈用具」
平成25年（2013）	市制90周年 松籟の宴「白隠禅画展」 資料館だより通巻200号発行

駿河湾の漁

川上　貢さんの漁話

南部の漁師たちの生活(1)

前号では大瀬崎（おせざき）の瀬洞（せぼら）漁場で操業された大謀網（だいぼうあみ）に従事していた岩手県南部地方からやってきた漁師たちについて語っていただいた。今号では南部の漁師たちの生活について振り返っていただく。

南部の漁師たちは２月に電車を使って沼津へやって来た。皆、背広を着ており、身なりの良い恰好であった。当時、沼津港から大瀬まで不定期に出ていた龍宮丸という船を貸切にして漁師たちを大瀬まで運んだ（写真１）。大瀬の浜辺には番屋と呼ばれる宿舎（写真２）があり、南部の漁師たちはこれから10月まで行われる大謀網にこの番屋で寝泊まりを行いながら従事した。大瀬に建てられた番屋は木造２階建てのボッコ（古いもの）だった。船頭･副船頭にあたるオオダイボウ･コダイボウは、２階の６畳一間の一部屋があてがわれ二人で使用した。残りの25人前後の若い衆は、２階にある４間（けん）ぐらいの長さの部屋を共同で使用した。布団が２列にして敷けるぐらいの広さがあった。仕切りというものはなく、プライバシーというものはない。１階には食堂と台所があり、食堂には食事を行うためのテーブルが置かれていた。

洗濯は自分たちで行っていたが、炊事は「カシキ」さんと呼ばれた女性が行っていた。この女性も漁師たち同様､オオダイボウが南部から連れてきた人である。男性30人の中に女性１人、まさに紅一点である。カシキさんは漁師たちと同じ番屋では生活せず、別棟で生活していた。30人近くの食事を朝昼晩、一人で作らなければならず、たいへんだったようである。

カシキさんは必要な食材を川上さんに頼み、川上さんはそれを魚市場の裏にある八百屋に注文した。八百屋は食材を港に持ってくるので、朝に獲れた魚を市場に出した後にそれを積んで大瀬まで帰った。酒と味噌と醤油は江梨の酒屋に注文した。これも船で取りに行った。自分たちが獲った魚も当然食卓にのぼる。１日３食、ご飯、お味噌汁、魚料理という献立だった。南部の漁師たちはいい値段で売れる魚だろうが何でも自由におかずとして持って行くので、川上さんは「あんな高い魚をなぁ…」と思うことも時々あった。魚が獲れなければおかずにする魚がない。そんな時は缶詰がおかずとなった。

南部の漁師たちの給料は年俸制であったが、春と秋の２回に分けて支払っていた。給料は大卒の初任給の２倍から３倍の額を支払っていた（昭和35年の大卒の初任給は13,000円程度）。年に２回しか給料が入らないため、前借が許された。前借をしたい人はコダイボウへ伝え、それを川上さんへ伝える。川上さんは大謀網の経営者である叔父さんに伝え、お金を受け取りコダイボウへ渡す。そして、コダイボウから漁師たちに手渡される。前借は給料から天引きされる。地元に給料を持ちかえるため、特別なこと以外にはなるべく使わず、生活費を切り詰めていた。給料の他に売上金の３％を支払っており、それを漁師たちで分けていた。また、昭和35年当時で１日に50万円ぐらいの売上があった時にはその都度ご祝儀として金一封が出た。コダイボウへ祝儀袋にまとめて入れて渡し、コダイボウから若い衆へ分けた。昭和30年代の漁が良かった頃には年に５，６回の金一封が出ていた。

凪のいい日には櫂で沖へ漕ぎだして行く。そんな時には故郷を思うようなそんな響きの歌が聞こえてくる。誰からともなく一人が歌い出し、そして、他の漁師たちが合いの手を入れていく。半年以上も続く故郷から遠く離れた慣れない土地での生活。その歌声には哀愁が漂っていた。

次号に続く。

（話：川上 貢氏　昭和５年生まれ　沼津市今沢在住）

写真１：沼津港から大瀬まで漁師たちを運んだ龍宮丸
（昭和35年頃　川上 貢氏 撮影）

写真２：南部の漁師たちが生活をしていた番屋（左側）
狩野川台風後のため損壊している
右の建物は当時行われていた真珠養殖のために三重県志摩から来ていた人たちの宿舎
（昭和35年頃　川上 貢氏 撮影）

資料館の調査ノートから㉓

千本～原海岸の木造船調査

９月13日と10月４日の２日間、千本～原海岸間において、木造船の調査を行ないました。

木造船は全国的に、昭和50年代半ばを境に、観光船など特別な需要のある地域以外では造船されなくなりました。沼津もその例外ではありませんが、千本以西の地曳網漁を行う海岸一帯では、波打ち際から急に水深が深くなる地形に適した船として木造船が重宝され、今も陸揚げされた木造船の姿を見ることができます。それら木造船がはたして今も現役で操業しているのか、船の状態はどうか、新造船（新しい船）はあるのかを主に調べることにしました。

あいにく現在は、土日だけ観光地曳網を行う、あるいは年に数回だけ地曳網漁を行うという網元（船の所有者）が大半らしく、調査当日、操業中あるいは漁を済ませた様子の木造船を見かけることはできませんでした。そこで、陸揚げされた船から波打ち際まで枕木が敷かれているか､網元小屋が操業中と推測できるか、船が手入れされているかどうかなどを条件にして、現在も操業中の木造船なのか否かを判断しました。

結果、千本～原海岸間で確認できた木造船の総数は146艘で、そのうち、上記の判断基準からおそらく現在も現役で操業しているだろうと推測できうる木造船は11艘ありました。また、確認できた木造船の大半は造船から20年前後は経ている古い船で、新造船はありませんでした。さらにそれら木造船のほとんどになんらかの修理が施された形跡がありました。

木造船の修理状況で、おもしろいと感じた点がありました。千本・大諏訪にある木造船は修理の跡が比較的古く、もともとの木造船の姿を極力残す方法がとられているように見受けられます。一方、片浜・原にある木造船は、明らかに船大工や船舶関係の方以外の方の手によると推測できる、もとの木造船とは異なる材を用いた修理が施されている傾向が見てとれました。

この写真は、大諏訪にあった木造船です。まず混ぜ釘といって修理時に追加でくぎを打ち込むことと、水漏れ防止の補修材が船先に施されています。その後喫水面にFRPシート（ガラス繊維の入った防水繊維）を張り、船全体に茶色の防水塗料を塗布してあります。遠目であれば、補修状態は目立ちません。

一方、上の写真は原海岸にあった木造船です。チリ（船尾の部分）の右側が破損したのか別の材で補強され、電動工具でボルト留めされています。また左側のチリの奥に水漏れ防止の補修材が施されています。補修に用いる材質や補修方法が、たとえば自動車修理工のような異業種の方によるもののように思えます。

資料館からのお知らせ

企画展の開催について

平成25年度企画展「沼津内浦・静浦及び周辺地域の漁撈用具コレクション」『沼津の船大工道具』を開催します。国指定重要有形民俗文化財の同コレクションの内容を広く知っていただくために、その中から漁船を製作した船大工道具を紹介するものです。

期　間　平成26年２月１日（土）～3月25日（火）

場　所　２階展示室

松籟の宴「白隠禅画展」を開催しました。

寄贈資料の中から

富士見十三州輿地全圖

今回は、新収蔵資料の地図を紹介します。これは、富士山を望むことのできる十三カ国を一枚の地図にあらわしたものです。製作に10年以上かけられたといいます。江戸時代後期の天保14年(1843)に出版された後、好評のため幕末まで何度も版が重ねられました。

十三州とは、上野、下野、常陸、下総、上総、安房、武蔵、相模、信濃、伊豆、甲斐、駿河、遠江の国のことで、現在では関東地方の一都六県と、山梨、静岡、長野の三県にあたります。とても大きな地図で、広げると二畳ほどあります。右の写真の中央右にある赤い部分は江戸で、左下の丸い茶色の所が富士山です。

富士見十三州輿地全圖
（上：全体図　左：富士山および沼津市部分）
秋山永年墨仙作　衆星堂　江戸末期
木版色刷　縦156.0cm×横176.8cm　杉山 義雄氏寄贈

地図には各地の山や河川、地名や道路、古城、古戦場、関所、神社、寺院、名勝旧跡や温泉、台場、灯台、小さな島にいたるまでが詳細に記されています。

沼津は城下を示す赤い印がされており、ここからのびる赤い線は東海道です。赤線は道路を表わしていて、色褪せていますが、富士登山道や頂上の周囲にもみられます。頂上をぐるりと囲むように書かれているのは、各峰の名称や池、名水などです。そして、主な峰の説明や眺望に関することが山腹に記載されています。

片浜付近から富士市吉原地区にかけては、沼川が大きく横切っている様子がみてとれます。実際と異なり、上流が黄瀬川と繋がっています。また、狩野川河口に「千本松原」と書かれています。淡島近くの重寺北側の黒い線は国境で、ここで駿河と伊豆に分かれます。

沼津市歴史民俗資料館だより

2013.12.25 発行　Vol.38　No.3(通巻200号)
編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1
沼津御用邸記念公園内
沼津市歴史民俗資料館　TEL 055-932-6266
FAX 055-934-2436
URL:http//www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm
E-mail:cul-rekimin@city.numazu.lg.jp

R70
古紙配合率70%再生紙を使用しています